瀬田の丘 裏庭版

主任司祭から瀬田の兄弟姉妹へ

主任司祭 小西広志 神父

創刊 2022 年
編集協力・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部　東京都世田谷区瀬田 4-16-1

カトリック歳時記

神の母 聖マリア（元旦）

カトリック教会は一年の最初の日に「神の母聖マリア」をお祝いします。なかなか、元旦の典礼で「神の母聖マリア」について触れることができませんので、マリアさまへの呼びかけとしては最高のものである「神の母」について歴史的な経緯を簡単に説明しましょう。

・・・

【テオトコス】

マリアさまが「キリストの母」（ギリシア語ではキリストトコス）ではなく、「神の母」（テオトコス）であると宣言された のは、五世紀のエフェソ公会議においてでした。テオトコスとは直訳すると、テオ（神）生む者（トコス）となります。つまり、マリアから生まれたイエスさまは神的な本性と人間的な本性を兼ね備えた方で、マリアさまは人間イエスを産んだのではなく、神的な存在を産んだのです。

そこで、マリアさまは神の母と親しみを込めて呼ばれるようになりました。

・・・

【天主の聖母の御保護によりすがり奉る】

マリアさまへの一番古い祈りをご存知ですか？ それは、「スブ・トゥウム・プレシンディウム」（"SUB TUUM PRAESIDIUM" 直訳「あなたの保護のもとに」）です。日本では終業の祈りとしてかつてよく唱えたものです。

天主の聖母の御保護によりすがり奉る。いと尊く祝せられ給う童貞、必要なる時に呼ばわるを軽んじ給わず、かえってすべての危うきより、常にわれらを救い給え。アーメン。

わたしも子どもの頃、ミサが終わって聖堂から出る前にこの祈りを大人たちと一緒に唱えました。

現代語訳では

神のみ母よ、わたしたちはご保護を仰ぎます。いつでもどこでもわたしたちの祈りを聞き入れ、御助けをもってすべての危険から守ってください。アーメン。

この祈りの原文はギリシア語だそうです。そして、パピルスに書き込まれたこの祈りの最古の写本には「テオトケ」（神の母よ）という呼び名が書き込まれているそうです。その写本は紀元三世紀頃のものだと言われています。

・・・

【「神の母」：人々が愛した呼び名】

つまり、エフェソ公会議の前から、すなわち教会が公式に「神の母」と宣言する以前から、人々は

マリアさまを「神を産んだ女、テオトコス」と呼んで親しんでいたのです。人々はどんな祈りを込めてマリアさまを「神の母」と呼んでいたのでしょうか。困難や苦しみ、悲しさや辛さの人生の中で「守ってください」という想いを込めていたのでしょう。マリアさまに祈ることで、マリアさまがイエスさまに祈りを、願いを取り次いでくれると信じて祈っていたのです。

マリアさまが「神の母」であることが、マリアさまに与られたその他の恵み（終生処女、無原罪の御宿り、被昇天）の基礎となります。マリアさまは「神の母」だからこそ、多くの恵みを神からいただいたのです。新しい年、いつもマリアさまに祈る、願い求める年でありますように。

主の公現

「公現」という言葉は、ギリシア語で神の顕れ、顕現を表すエピファネイアに由来します。古代では立派な人の登場、例えば支配者の即位や都市の訪問の際にもこの言葉が使われたそうです。まさに、馬小屋に眠る幼子イエスこそが、この世に顕れた救い主に他ならないのです。

公現祭は四世紀の前半からエジプトで祝われていたいわれています。ちょうど、異教の祭儀が一月六日前後に執り行われていたことも公現祭が成立した背景にあるだろうと考えられています。主の洗礼、主の降誕、カナの婚礼といった主の秘義の数々を祝う祭りとしてエジプトで形成され、しだいに東方教会全体に広まっていったようです。四世紀末から五世紀にかけて西方教会にこの習慣は伝播していきました。しかし、そこでの公現祭はイエスの洗礼に加えて三博士の礼拝（マタイ2・1―12）を諸国民への救いの訪れとして祝う形式へ変化していったようです。

中世を通じて公現祭に関する信仰心が様々な形で表現されていきました。まず、公現祭の前に徹夜祭が祝われ、降誕祭後八日間にわたって独自の典礼が執り行われ、最終日には主の洗礼を祝うようになりました。また、三博士の名前が伝承と共に生まれていきました。カスパール、バルタザール、メルキオールです。メルキオールは幼子イエスに黄金を献げた老人、バルタザールは没薬を献げた壮年、カスパールは乳香を献げた青年として表現されました。それぞれ、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人であったとされました。そこでカスパールは黒人として表現されるようになっていきました。このように世界中のすべての人が救い主である幼子イエスを礼拝するのだという信仰心が表現されていったのです。

「東方の三博士」となっていますが、マタイ福音書によれば東の方からやってきた占星術の学者（マゴイ）たちです。これはイエスの時代にはペルシャの宗教家、特に星占いや魔術師を意味していました。時代が下ってマルコ・ポーロはペルシャのある町に三博士の墓があると記しています。この墓は現存していませんが、イランのある地方には、自分たちの地域にキリスト教を伝えたのは三博士であると信奉するキリスト者がいるそうです。また、三博士の墓がヨーロッパにあるとする伝承も生まれていきました。それによればドイ

ツのケルンに墓が移され、ケルンの大聖堂は三博士に献げられたものとなりました。

中世の公現祭では星の導きで旅をした三博士を表現するような典礼が生まれていきました。公現祭のミサの奉納行列で簡単な劇を行うのです。この習慣は広く親しまれ、現在でも公現祭のミサには三博士の扮装をした子どもたちが手に手に献げ物を持って奉納行列に加わることがあります（イタリアやドイツ、ポーランド）。またイタリアのローマでは公現祭の前の晩にベファーナという魔法使いの老婆がほうきに乗ってやって来て、良い子にはお菓子やキャンディを、悪い子には石炭を靴下に入れておくという言い伝えがあります。公現祭には黒装束の魔法使いがローマの町に登場します。

日本では、主の公現の祭日は一月二日から八日の間の主日、すなわち日曜日に祝うことになっています。

みことばに寄せて

主が御顔をあなたに向けて
あなたに平安を賜るように
（民数記6・26）

言葉には力があり、ある言葉が厳かに発せられたとき、その言葉を通じて神秘的な力が働き、言葉が実現すると古代の人々は考えていたようです。旧約聖書の中にたくさん登場する祝福の言葉はこういった考え方のもとに生まれていったのでしょう。

旧約聖書では、まず、神が祝福します。「産めよ、増えよ」（創世記1・22、28）は被造物に対する祝福の言葉です。こうして、被造物は栄えていきます。また、神は自然を祝福します。こうして豊かな実りがもたらされます（例：レビ記25・21）。また「主を畏れる」人、「主に従う」人、「戒めを忠実に守る」人を神は祝福されます（例：詩編128）。神が示す祝福の模範を受けて人間もまた祝福をします。特に家族の長は子どもを人生の場面ごとに祝福しました。こうして、祝福を通じて愛の交わりが可能となり、新しい生命が誕生し、共同体を支える神の力が力強く働くようになるのでした。

祝福は神に由来するものですから、人は神の祝福を媒介する存在なのです。イスラエルの民を祝福するのは祭司の役務でした。祭司の祝福は民数記6章22―27節に定められています。これを「アロンの祝福」と呼びます。

22 主はモーセに次のように告げられた、
23「アロン とその子らにこう言え、『あなたたちはイスラエルの子らをこのように祝福して彼らに言え、
24〈主があなたを祝福し守ってくださいますように。
25 主があなたの上にみ顔を輝かせ、顧みてくださいますように。
26 主があなたにみ顔を向け、平安を与えてくださいますように〉』。
27 このように、彼らがわたしの名をイスラエルの子らの上に置くなら、わたしは彼らを祝福する」
（フランシスコ会訳）

特徴的なのは最初に民に対する神の働きかけを祈り、続いて民のための神の活動を祈っている点です。24節では神が祝福する働きかけと、守るという活動を願います。25節では神を光になぞらえ、人に光を照らすことを願った後で、「恵みを与えられるように」（新共同訳）と神の活動を願っています。26節では、もっと具体的に神が顔を人間に向けてくださるようにと願います。顔は神の存在そのものを表します。もし神が顔を隠してしまったら、暗闇の中に人は置かれてしまいます。

「憐れみ深い主よ、御顔をわた

しに向けてください。あなたの僕に御顔を隠すことなく苦しむわたしに急いで答えてください」（詩編69・17―18）という人間の叫びは詩編の中にたくさん見られます（27・9、102・2、143・7）。御顔を向けるとは人格的に、あるいは個別的に神が関心をあなたに向けてくださいますようにという意味です。そして、平安という特別な祝福の中に置かれることを祈るのです。26節の「賜る」（新共同訳）あるいは「与える」（フランシスコ会訳）と訳された言葉は「定める」、「確立する」という意味があるそうです。そうしますと、「主があなたのために平和を確立しますように」と祈り、願っていることになります。26節は「主があなたに個別の関心を向け、あなたに正面切って向かい合い、あなたの祝福を確立されますように」という意味になるでしょう。わたしたち一人ひとりと向き合って、個別に祝福を与えてくださる神に感謝いたしましょう。

シノドス的教会をよりよく理解するために

シノドスについて

二〇二一年五月二一日に教皇庁シノドス事務局は、世界代表司教会議（シノドス）第十六回通常総会を二〇二三年十月に開催すると発表しました。これは、本来二〇二二年十月に予定されていたものを一年間延期して開催するものです。テーマは「シノドス的教会のために、交わり、参加、そして宣教」となっています。

シノドス事務局の説明によると、今回の通常総会はこれまでとは異なったプロセスを経て準備されるそうです。

二〇二一年九月に討議のための提題とその解説（リネアメンタ）が発表され、十月九日の教皇のミサで具体的な準備に入りました。そして、世界中の各教区でもシノドスのためのミサを十月一七日に行うようにとされました。それぞれの教区はリネアメンタ（提題とその解説）についての討議をまとめ（二〇二二年四月）、それを受けて各国の司教協議会で意見を集約し（九月）、同時にアジアの司教団としても意見を分かち合う予定です。世界各地から持ち寄られた意見は、最終的な通常総会のための作業文書（インストゥルメントゥス・ラボーリス）へと反映されていく予定です。

世界代表司教会議（シノドス）に向けて、司教協議会での提題とその解説（リネアメンタ）への回答などはこれまでも行われてきました。しかし今回は、広く教区のレベル、ひいては小教区のレベルにまで討議と分かち合いのすそ野を広げた点が画期的と言えるでしょう。さらには「シノドス的教会」という聞きなれない言葉が登場しています。これは教会が備えている特性の一つです。そして、この点についてあまり顧みられてきませんでした。そのため、「シノドス性」についての理解を深めていくのも第十六回通常総会の目的となっている点も見逃せません。

シノドスの歴史

世界代表司教会議（シノドス）は、第二バチカン公会議後の一九六七年から始まりました。通常総会はおおむね四年ごとの開催となり、それ以外に臨時総会、特別会議も行われます。教会が直面している課題について、世界中の司教の代表が集って討議をし、教皇へ意見を申し上げる役目を世界代表司教会議（シノドス）は担っています。教皇は司教たちの意見を聞いた上で、シノドス後の使徒的勧告として意見を発表するのが通例となっています。

半世紀以上におよぶ歩みは、教会に大きな影響を与えてきまし

た。しかし、一般の信徒の関心は決して高いとは言えないでしょう。

わたしは、一九九四年に開催された第九回通常総会を印象深く覚えています。そのおよそ十年前に臨時総会（一九八五年）を催して「第二バチカン公会議についての再確認」がなされましたが、それを受けて、第七回通常総会（一九八七年）では「信徒の召命と使命」が討議されました。続く、第八回総会（一九九〇年）では「司祭の養成について」深められました。四年後の第九回通常総会は「奉献生活者」に関するものでした。これは、新しい世紀の始まりを見据えて、教会を構成する様々な人々の側面に光を当てるという一連の流れに沿ったものだったと思います。事実、新世紀を迎えての最初の通常総会（第十回通常総会、二〇〇一年）は「司教」に関するものでした。

このように世界代表司教会議（シノドス）は、時代の流れの中にあり続ける教会が直面する課題について取り扱い、教会のあり方を問いかけるものなのです。

二〇一四年に召集された臨時総会は「家族」に関するものでした。そして、翌年の通常総会も「教会と現代世界における家庭の召命と使命」のテーマのもと家族に関するものでした。詳しいことは検証が必要で、憶測で発言してはならないでしょうが、どちらの世界代表司教会議（シノドス）もあまり成果が見られなかったように思います。参加した司教たちの一致が見られなかったのではないかと考えます。世俗化の進む西側先進国の司教たちと人口問題に直面する開発途上国の司教たちでは、家族や家庭についての理解にあまりにも隔たりがあったのだと思います。さらに、適宜開催される世界代表司教会議特別会議では、教皇の意向がうまく伝わらずに、教皇の発言と行為がパフォーマンスのように取り上げられ、批判されました。二〇一九年の汎アマゾン地域に関する特別会議などは、討議されている問題の重要性が教会全体に受け止められなかったと思います。

その一方で、評価すべき点もあるでしょう。かつては教皇が裁定者のような役割を果たしながら、参加した司教たちが自由に意見を交換した会議のあり方から、最近は、多くのゲストスピーカーを招き、教会内外の意見に耳を傾けるようになりました。教皇もローマの司教として、自分の意見を発言し、討議に参加しています。

対話を重ね、より積極的に参加し、そして、ともに歩んでいく。そのような方向へと世界代表司教会議（シノドス）は変わりつつあります。こうして、第二バチカン公会議から半世紀を経て、「神の民」の素晴らしさを再確認するよい機会となっています。世界代表司教会議（シノドス）を活用しながら、教会のさらなる改革の歩みが始まっているように思います。

新しい教会の姿を表すのは、教会がすでに備えている「シノドス性」の再発見です。

シノドス性とは

「シノドス性」ということばが登場したのは、突然のことのように思えます。「シノドス」は日本語で「教会会議」と訳されてきました。長い教会の歴史の中で「教会会議」はしばしば行われてきました。『使徒言行録』15章に記されているエルサレムでの使徒たちによる会議などがその発端になると思います。

教会が何か危機や問題に直面したときにそれぞれの地域ごとに

会議を催し、信徒も聖職者も協力しあって課題に取り組んできました。また、小教区など信仰の共同体に属する信者が一堂に会する会議も「シノドス」と呼ばれてきました。そういった教会の伝統に従って日本でも、例えば長崎大司教区で近年「教区シノドス」を開催しています（二〇一四年）。

二〇一五年十月一七日になされた世界代表司教会議設立五十周年記念式典での教皇フランシスコの発言は画期的でした。そのうちのいくつかを特に説明を加えずに掲載します。

「『シノドス性』の歩みとは、神が第三千年期の教会に期待しておられる歩みなのです」

「ある意味、主がわたしたちに求めておられることは、すべて『シノドス』ということばの中にすでに含まれています。」

「『シノドス性』は教会を構成するひとつの側面です」

「教会とシノドスとは同義語である」

最後のものは古代の教父、聖ヨハネ・クリゾストモからの引用になります。教皇さまは教会のこれまでの歴史の中で「シノドス」が存在した事実を確認し、これからの教会の歩みにとって「シノドス」が必要であると主張しておられます。「シノドス」は啓示のより深い内容を示すことばです。「共に」を示すギリシア語の「シン」という接頭語と、「道」を意味する「オドス」が組み合わされたこのことばは、神の民が共に歩んできた事実を指し示しているからです。

先に述べたように、このことばは「教会会議」を指し示している時代もありました。しかし、近年「シノドス」から「シノドス性」という表現が生まれ、さらには「シノドス的」という形容詞も生じていきました。「シノドス性」とは教会の特性を表しています。そして、この特性に彩られている教会こそが「シノドス的」教会と呼ばれるのです。「シノドス性」の発見とは教会が聖霊の働きの中で見いだした自己理解の一つなのです。つまり「シノドス」とは、単なる会議の名称ではなく、教会が備えている特徴を表すものということです。そして、教会は「シノドス」という語が示すとおり「共に歩む」ものです。

日本のカトリック教会は第二バチカン公会議の後、半世紀にわたって日本の社会と「共に歩む」教会を目指してきました。ですから、教会にある「シノドス性」についてはある点で体験済みだと思います。特に一九八七年に開催された「福音宣教全国推進会議」、いわゆるNICEは「共に歩む」教会をよく表していたと思います。それから三十年以上が経過しました。わたしたちの教会が日本の社会の中でどのような立場にあるのかを見つめる必要があるでしょう。そして、これからわたしたちの教会がどのようになっていくかを見わたすことも求められていると思います。ですから、「シノドス」への取り組みは、これまでの歩みを見つめ、今の姿を共有し合い、そして未来に向けて一歩を踏みだすことなのです。

一昨年来、新型コロナウイルス感染症によって社会も、個人も打撃を受けました。教会も例外ではありません。このような時だからこそ、主に信頼して、聖霊の助けを願いながら、御父へと向かう信仰の歩みを続けていきたいものです。

絵画に寄せて

聖パウロの回心

「ところが、旅を続けてダマスコに近づいた、真昼ごろのこと、突然、まばゆい光が天からわたしの周りを照らしたのです。わたしは地に倒れました。そして、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』と言う声を聞きました。そこでわたしが、『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、『わたしは、お前が迫害しているナザレのイエスである』とお答えになりました」（使徒言行録22章6―8節）。

ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ（一五七一―一六一〇）は日本でも人気のある画家ですが、その作風は大胆な構図と陰影の強調を特徴とするものです。

「聖パウロの回心」は一六〇一年に描かれたものです。すでに名声を博していたカラヴァッジョは、ローマのサンタ・マリア・デル・ポポロ聖堂にあるチェラージ礼拝堂側壁を飾る「聖パウロの回心」と「聖ペトロの磔刑」の二作品を依頼されます。しかし、最初に描いた作品は依頼者に気に入ってもらえず、受け取りを拒否されてしまいました。

それで、二度目に描いたのが、この作品となります。ダマスコに近づいたとき、サウロ（パウロ）が「まばゆい光」に打たれて倒れているところがモチーフとなっています。受け取りを拒否された一作目も、同じモチーフで描かれていますが、この二作目の方が構図はより単純化され、倒れたサウロ（パウロ）に焦点が当たっています。

画面の右上に、わずかに天の光のようなものが描かれ、もつれた髪の馬丁は、倒れたサウロ（パウロ）には関心がなく、むしろ脅える馬をなだめることだけが気になるようです。彼の足の浮かび上がる血管、そして画面の大部分を占める馬の臀部などの描写がこの作家の特徴をよく表しているでしょう。受け取りを拒否された一作目が宗教画の雰囲気を保っていたのに対して、本作はサウロ（パウロ）の個人的な体験が強調されています。

小さな礼拝堂の中に本作品は飾られています。この絵画を正面から見ることはできません。どちらかというと下から見上げるような感じで鑑賞します。そうしますと、馬の大きな臀部はさほど気になりませんし、むしろ、不思議なことに、倒れて天を仰いで手を広げているサウロ（パウロ）と同じ視点に立つことができます。

「聖パウロの回心」ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジオ

主任司祭からのお知らせ

コロナ禍にかかわらず、皆さまがよく教会に集ってくださることに感謝いたします。感染予防に気をつけてミサにあずかりましょう。

フランシスカン・コロナ

コロナといっても、こちらは「冠」の方のコロナです。フランシスコ会独自のロザリオの祈り方があります。これを「コロナ」と呼びます。五連ではなく七連のロザリオです。通常のロザリオの祈りと比べて、もっと手軽に祈れるものです。長崎のロザリオ職人さんにお願いして、七連のロザリオを編んでいただきました。ご希望の方は実費でお分けします。主任司祭に尋ねてください。毎週金曜日の午後３時より聖堂でフランシスカン・コロナを皆さんと一緒に祈っていますので、もしよろしかったらご参加ください。

アントニオ会館の改修工事

アントニオ会館の改修工事を 2022 年中に実施する予定です。工事中は皆さんにご迷惑をおかけしますが、ご協力ください。

身の回りのものにご注意

ミサに与っている際などは身の回りのものにご注意ください。

アントニオ食堂

修道院では毎週木曜日にアントニオ食堂を実施しています。現在、50 食のお弁当を提供しています。皆さんのご協力をお願いします。

典礼の暦

1 月 1 日　神の母聖マリア　ミサ：午前 0 時、午前 10 時
　2 日　主の公現
　9 日　主の洗礼
　16 日　年間第二主日
　23 日　年間第三主日
　30 日　年間第四主日　「世界こども助け合いの日・献金」
2 月 6 日　年間第五主日
　13 日　年間第六主日
　20 日　年間第七主日
　27 日　年間第八主日
3 月 2 日　灰の水曜日　ミサ：午前 6 時 20 分、午後 7 時 30 分